



東方絵ろ本

イーゼル社

R18
成人向け



東方
絵本
②本

もこけね: APPLE228
マリアリ: 相川りょう

R-18

心得

作品は東方 project の二次創作であり、原作、または原作者をリスペクトして創造された作品であります。

許可なく転載、加工、販売などと致します行為は禁止しております。

また作品はイーゼル社発行の本誌

- ・東方絵ろ本
- ・東方絵ろ本②

の二つを合わせた販売品となっております。ご了承くださいませ。

原作：上海アリス幻楽団

鴉天狗の小休止

文・ハムム 絵・k a k a o

相思相愛の射命丸文と河城にとり。

同じ妖怪の山に住む二人の妖怪だが、守矢一家が及ぼした異変を博麗神社の巫女・博麗霊夢が解決した以降、文々。新聞の仕事が激務。好敵手・姫海棠はたてに射命丸文は負けじと頑張っているのか、どうなのか………。

そんな文の多忙に、にとりは

文と会えない事に哀情の念を抱いていた。そして切なさがにとりの心を動かし、

ある日、にとりはあるモノを発明する。

そこに久しぶりの取材休暇に、

射命丸文は河城にとりの許へ訪れる。

するとそこには——鴉天狗も驚愕！

あられもない姿のにとりがそこにいて……

「んあつ……いやあ……すごい、なにこれ……あ……ひやあつ！」
河城にとりはディルド型の機械を手に持ち、自分の秘部に当てていた。機械の微動にじわじわと快感の波が押し寄せ、甘美な声が漏れる。

するとそこへ、

「あややや、にとりさん！ いやですよー？ こんな真つ昼間からしてらっしゃったんですか？」
「ひやいっー？」
背後から突如聞こえた天狗の忍び声に甲高い声を上げて、身体



が飛びあがった。その勢いで発明品が射命丸文の足元に転がる。
「これは……なるほどなるほど」
すると文は左右に手を広げ、長大息をした。にとりは薄らと涙を浮かべ、上目使いに文を見た。
「だって、だって、文……最近、文々の記事なので、すぐにとっかいつちやうし……さみしい」
文は柔らかかに微笑んで、にとりの頭を帽子の上から撫でる。
「それはすいませんでした。でも私、今日会いに来たんですよ。にとりさんに早く……会いたくて」

文は膝を落とし、にとりの頬に手を当て、顔を近づけた。

「あやあ……」

「私がお相手いたします……」

二人はお互いに手を絡め、そつと瞳を閉じ、唇を重ねた。

「んちゅ、ん……ちゅ、あ……」

口を離すと液糸の架け橋が作られた。にとりはそのまま文の黒いリボンを緩め、ボタンを外していく。やがて下着もはだけ、着衣したままの格好になる。それ以外の全てが露わになって……。そんな姿にとり二人は頬を染める。


「にとりさん、素敵です。でも、帽子は取れないんですね……」

文はニトリの背中を押して倒した。ゆっくりとにとりを押して倒した。そして再びキスをする。さつきよりも深い、熱いキス。文の右手がにとりの右胸へ。

「ちゅ、じゅるる……、るれ、くちゅ……ちゅっ……う……」

「あやあ……すこいよお……」

にとりはとろんとした目つきになり、息も上がってきた。そんな姿に文もドキドキして、愛おしさが込み上げてきた。



二人は寄り添うようにして、お互いの瞳を見つめ合う。紅色に耳まで染まった顔、お互いのすべすべとした肌に、服は乱れていた。するとにとりが突如抱きついてくる。

「あやのむね、ふかふかできもちいいよお〜」

河童はその小さい手でその天狗の二つの果実をつかみながら、顔を埋めた。

マシユマロのような柔らかさとベルベツドのような肌触りが手のひらに伝わってくる。

「ふふ。にとりさん、まるで赤ん坊のようですよ」

「えへへ……」

その文の言葉でスイッチが入ったのか、にとりの手つきはだんだんと激しくなる。胸の先端を甘噛みするように吸い始め、

「にとり……り、さん……あ……」

文も甘美な声を漏らした。

「ちゅ……ん、ちゅ、ちゅ……」

「あややや……すこい、です……」

からだか、淫いちやいます……」

稚拙だが愛ある行為に、身体が痺れるような快感がやってくる。

文にもスイッチが入る。
「にとりさん……こんなものは
どうですかね……」

すると文は何処からか、キユウ
リを取りだし、にとりの口に咥え
させた。

「落としたら、やめてしまいます
からね……いいですか？」

「んむううっ……む、んう……ず
う……ふあや……むひい……！」

キユウリを咥えさせたまま、文
はにとりを四つん道いにさせて、
小さなお尻を掴み、バックから陰
門に舌を入れた。

「るれ……、んっ……ちゅ……ぶ
ぶっ……じゅずず……あ……！」
「ひむう……んぐっ……！む
ず……ひや、○☆△×……！？」
突如甲高い声をあげて、にとり
の身体が弦のように反り返った。
口を離し、文は濡れ濡れのそこ
へ中指を挿入したのだ。そして一
緒にクリもしやぶるように舐め
まわした。にとりの咥えた口から
は唾液が垂れる。反った身体もし
なるように倒れ込んだ。激しい快
楽が包み込み、走り抜けたのだ。
「ひゅむ……ず、う……んっ！」

にとりの口からキヌウリが落ちる。唾液がぼたぼたと流れ、せわしい呼吸を伴った。

にとりは報復を考えた。ふらふらな脚を従えて、文の元へ。秘部からはとろりと甘露を垂らしていた。

「ど、どうしたんですか……にとりさん？」

すると、にとりは黙って文の腰を浮かせ、恥部を持ち上げた。ぐっちよりと濡れた秘密の花圖から甘露が、お尻を伝って垂れ落ちた。

そしてにとりは文のふとももを掴み、むしやぶりつく。

「ぶちゅ、ちゅ……、びへ、じゅすず……くちゅ、す……じゅー」

「ひゃ、あ……！ ああ……ひゃああ、はげし、い……にとりさ、んーひああ、んああっー」

「ちゅすず、ぶ……じゅーる、へちゅ、じゅ……ちゅぶらうー」

「ひゃああああ……！ 頭の中、が、つつ、まっしろに、なりそうです……！ んああ、っ……！」

どちらも限界だった。快感の絶頂がすぐそこまで来ているのだ。

酒に交わる霊の花

文・ハムム 絵・潤咲まぐろ

ある日、西行寺幽々子と魂魄妖夢は、博麗神社の巫女・博麗霊夢が主催した幻想郷一大の大宴会にお呼ばれたのだった。勿論、その席には幽々子の大好きな、

……酒、

……酒、

が用意されていた。

言わずもがな西行寺幽々子は大酒を喫して、亡霊の姫という威厳満ちた姿は無く、ただ、ただ……酩酊を得た酔っ払いだった。宴会も終わり、幽々子は妖夢に連れられ、やつのことで住処へと戻る。その矢先、幽々子は再び酒を持ち出して……

「あわわ……幽々子様、飲みすぎ
ですよ……！」

魂魄妖夢が現在は酩酊亡霊、西
行寺幽々子を心懸かりな面持ちで
介抱していた。

「妖夢も、のみなさいよ〜」

「私がお酒を全く飲めない事、ご存
知じゃないですか……！」

頬を薄紅色に染める幽々子の両
手には左手——杯、右手——扇。

その杯を口元へ運んでいき、

「ほら、ヒック、飲ませてあげるか
ら——んぐ〜」

接吻をする。

「んちゅ……う……ちゅ……」

幽々子は妖夢の口へと酒を移して
いく。軽く喉を鳴らして酒が体内に
流れ込んだ。

「ふはぁ……」

重ねていた唇を離す。幽々子は変
わらずに酩酊感漂わせる笑顔で妖夢
を見つめていた。

項垂れていた妖夢がゆっくりと顔
をあげる。すると、

「あへ……？ ゆゆこしゃまがら
たひもいらっしやゆ……？」

とろんとした目で幽々子を見上
げるへへれけ半霊がいたのだ。

深い接吻が続く。幽仄子は手を添えて妖夢の頬をそっと包み、濡れた舌をゆっくりと絡めながら、

「ちゅ……るれ、ゅ……んっ、むちゅ……ぶぶ、じゅる……！」

ついはみあう唇間から甘い吐息が零れていく。妖夢の表情は蕩けそうな顔で、瞳は幽仄子だけを見つめている。

「ゆゆいさま……すきれす！ゆ

ゆいさまひ、つかえられへ……

しあわひえです……！」

「私も、妖夢……大好きよ♪」

幽仄子は格別の笑顔だった。

そのまま二人は再びキスを交わし、幽仄子は妖夢の衣服に手を伸ばす。浅黒いリボンをほどき、三つの掛けボタンを外していく。スカートのホックもゆっくりと取り外し、妖夢の姿は薄い白服と白下着を纏っているだけ。その服もはだけさせ、幽仄子は妖夢のこぼりな胸にそっと触れていく。

「んっうっ……！！う、ゅ、んあー！ぶ、ちゅ……！」

突如の事に妖夢の身体がピクシッと反応する。性感帯がくすぐられ、肢体に熱を帯びていく。

「ゆめこさま、一緒に……」

妖夢は幽々子に向き直り、顔に吐息がかかる程の距離まで迫って、身体を倒していく。既に半脱ぎの着物をそっとすらし、幽々子の上半身を露わにする。麗しい桜花彩色の髪が、すべすべでまるで白粉でも塗ったかのような鮮白の肌にとても映えていた。たっぷりと手にも収まらない幽々子の乳房を妖夢は揉みしだいていく。幾らでももみ続けていたくなる程の弾力と柔らかさを備えていた。

「んっ、あ……う……やあ……」
引き締まった肢体に女性の肉体的魅力を存分に有する幽々子は不随意にピクン、ピクンと震戦している。

「ゆめこさま、ゆめこさまー！」
妖夢は主人の名を連呼する。既に酒は飲み上げる主人への愛おしさに押しつぶされている。

「ちゅう……んぱあ……ちゅう……」
胸の尖端を口に含む。

「ふああ、やっ、そこは……！」
妖夢は舌の上で転がしたり、吸ったり、甘噛みをしていった。

「二人は衣服を脱ぎ、お互いの恥部を重ね合わせ、脚を組み替えた。じゅぶじゅぶに濡らした少女達の園が愛撫を交え、お互いにオーガズムの波が押し寄せた。」

「んひゃああ……！ ゆめじしやま、わら

ひ……もっ、きもちよすぎって……！」

「ああ、んっ……！ んんあっ、よ、よっ

む……！ わ、あんっ、わたしも、よー！

やあ……あっどどどても……きもち

よくなってきた……もっ……っ！」

そして二人は求め合う。

「好きよ、妖夢……！！ これからも……
いっしょに、ひああ！ わたしの……っ、
そはっ……！！」

「ひゃうう！！ わらひも、ゆめじしやま
と……！！ すきでしゅ、だいすきれす、
んあっ……っ！！ だから……！！」

二人は結び合っている。これからは
っど。ずっずっど。

「い、いっひやいましゅー！ わらひ、も
う、ゆめじしやま……！！」

「ああんっ！ わたしも、キちゃう、も
う……らめえええ！」

そして快樂の絶頂へと至る。

「いっきゅっうっうっうっうっうっうっ！」

主従の比翼連理

文・frost

絵・u介

紅魔館に長年住する――

その主人、レミリア・スカーレット

メイド長、十六夜咲夜。

主従関係にある彼女達だが、咲夜の主人に対する忠誠心とは別に抱く恋心は常に爆発寸前。そんな思いをレミリアも分かっていた。


紅魔館の吸血鬼も咲夜への慈愛とは異なる、一つの恋心がそこにあった。

幻想郷紅魔館――真夜中の事。


いつものように咲夜は仕事を終え、部屋に戻ろうと、紅魔館の長い廊下を歩いていた。

しかし、主人レミリアの寢室前でこんな時間なのにも関わらず部屋が明るい事に気づく。

すると扉の隙間から目にした光景は………



真夜中に、レミリアの部屋から微かな明かりが灯っていた。
それを不思議に思った咲夜は扉を開いて中を覗くと、
「んあ……はあ、ああ……こんなに、一人でも……ふあ！」
レミリアは自分の小さな蕾を自らの手で愛撫していた。
「お嬢様がお一人で……！」
咲夜は鼻から熱いものが吹き出しそうになるのを両手で押さえる。
自分の愛する人の淫らな姿にすっかり興奮していた。
「はあ……いい、すごく……！」



咲夜は自分の主の普段滅多に出すことのない声を聞き入っていた。
無論、鼻を押さえている。

「あんな愛おしそうな顔をして……とても可愛らしいです」
咲夜はその姿をじっと覗き見ている。

「……ああ、んっ！ こんな、私じゃない。でも、ああ……！
止まらないの……んっ！」

それをもっと近くで見たいという欲求に駆られた咲夜は、少し体を傾ける。
すると扉が開いてしまった。

「ったー」

咲夜は床に頭をぶつけながら、レミリアの部屋に入り込む。

「はぁ！……ん？ なんだ咲夜覗き見か？ そんなところにいるなら手伝いなさい。」

レミリアはゆっくりと倒れている咲夜に近づき、その手をとってベッドに招き入れる。

「で、ですが、私などでお嬢様のお相手が出来るでしょ——」

咲夜は自信なさげな声を出した瞬間にレミリアに唇を奪われてしまった。

「んん！……はぁ、お嬢様」
とろんとした瞳に変わる昨夜。

「主の命令だ。お前の手で、私を気持ちよくしなさい」


その言葉に従い、咲夜はレミリアの肌ざた乳首に口を当てる。

「ふぁぁ！……いいわ、もっと丁寧にして頂戴」

咲夜はレミリアの乳房を優しく、ゆっくりと撫でまわす。

「ふぁぁ！……いい。ひぁ、あぁぁ！咲夜、上手ね」

その言葉すら聞こえていないほど、興奮している咲夜。



咲耶は胸を最初とは打って変わって、強めに刺激したり、口を当てて乳輪を吸ったりと攻める。

「はぁぁ！ んんぁ、ひぁ！ ……もっと、もっと強くして良いわ咲耶！」

その言葉に咲耶は、

「畏まりました。お嬢様」

すぐに承諾して、強めに乳房を握る。

「んんぁ！ はぁぁ……っぁ！」

エミリアの甘い声もさらに大きくなっている。

咲耶はさらに乳房に甘噛みを与える。

そしてもう片方の胸を強く揉み解す。

「お嬢様……素敵です」

咲耶は胸では飽き足らず、レミリアの自らが愛撫していた甘い蜜が垂れている場所に手を伸ばす。

「ひぁぁ！ そこ……んぁ！」

そこに触れただけで、電撃が走ったように反応するレミリア。

「お嬢様……今度はこっちを」

そしてその中にゆっくりと指を入れて行く咲耶。

「あぁ！ すごい！ んんぁ！」



レミリアの中を指でかき混ぜる咲耶。そして、
「はあ！ もう、……イクッ、んんあ！ ああああ……！」
レミリアは体を小刻みに震わせ、すぐに絶頂に達した。
そして咲耶の方を向き、
「はあ……はあ。今度は、貴女の番よ。咲耶」
そう言って、すぐに立ち上がるレミリア。
そして、部屋のダンスから細長いアイマスクを取り出し、それを咲耶に向ける。

「え？ ええ？ どうゆう事ですか、お嬢様！」
動揺する咲耶。そんな事を全く気にせず、レミリアは咲耶の目の部分だけにそのアイマスクを当て、そして強く縛った。
「ふふふ、さっきはだいぶ楽しんでたみたいね。今度は私が楽しませてもらうわよ」
そう言い、さらに部屋の机の上になぜか置いてある練乳を手にするレミリア。
「お嬢様何を……」
「咲耶は何も心配いらないわ」



レミリアはその手に持った練乳のキャップを開き、それを咲耶に傾ける。
そしてゆっくりと練乳を咲耶に垂らしていく。
「ひやぁ！ なんだか冷たいのが……」
レミリアはその言葉も無視して、さらに練乳を垂れ流す。
「服が邪魔ね。少し脱がすわ」
咲耶の服を半脱ぎさせた状態で、体中に練乳を垂らす。
「少し口を開けて、咲耶」
そう言って口の中にまで練乳を垂らす。

「んんっ！ 甘い……です」
咲耶の口では収まらなく、口から白い白濁液が垂れている。
「ふふ、じゃあそろそろ……」
レミリアはそのいやらしい咲耶の唇に舌を入れる。
「んん！ はあ、んあ！」
舌が何でも絡み合っているやらしい音が辺りを包む。
「はあ、んん！ んちゅ、ああ、ちゅ、んあ！ 口の中が甘いわ」
レミリアは微笑みながら、咲耶の唇から舌を離し、その視線を下に向けていく。



練乳でテカテカといつも以上に主張している咲耶の胸に、レミリアは躊躇いもなく口を付ける。

「はぁん！ お、お嬢様。そこは……んぁ！ あっ……はぁあ！」

その甘い蜜の乗った大きな膨らみをひたすら舌で転がす。

「んん……咲耶のここ、甘いわね。これは……母乳かしら？」

片方の舐めていない胸もレミリアは手の中で納めて、揉み解していく。

「母乳……んぁ！ なんて、出るわけじゃないじゃないですか！」

咲耶は切ない声で反論するが、レミリアは咲耶の言葉を聞かずに、目の前の膨らみに集中している。

「少し、強く……」

レミリアは舌で舐めるだけではなく、軽く甘噛みを始める。

「ひいい！ ……な、何してるんですか！」

その言葉も聞かずに、胸に何度も甘噛みを与えていくレミリア。

「はぁ！ ああ、いた、い……んんぁ！ ひいっ！」

声をあげる咲耶。



「痛がっても、体は正直だわ。ねぇ咲耶？」

咲耶の耳元に顔を近づけて、耳を舌で舐めまわすレミリア。

「そ、そんな事は……」

その言葉とは裏腹に、咲耶の花園はピンク色の布の上からでも湿っているのが分かる位だ。

「今度はこっちね」

そこに手を伸ばし、レミリアは企みのある笑顔を咲耶に向ける。

パンツの中に手を入れて、まずは周りを優しく撫でる。

「んん！ はあ、……ああ！」

それだけでも大きく体を震わす咲耶。

「ふふふ、それじゃあ一気に！」

その花園の中に指を侵入させていくレミリア。

そして一気に中を乱器にかき混ぜる。

「ひゃ！ んっ…… つよい……つよい。はあん！ イクッ！」

「イキたいならイッて良いわよ！」

その言葉通り、咲耶は体を大きく震わせて、

「イク！ イク！ んんああ！ はあ、んんあ……ああ！

イクううう～！ はあ……はあ」

彼女の傷は私の傷

文・シゲ

絵・APPLEE228

相思相愛の藤原妹紅と上白沢慧音。
実如人間の里に正体不明の妖怪が現れ、慧音は人間の為一人で立ち向かう。慧音のお陰で妖怪は追い払えたが、身体は傷だらけ。

事情を聞き、慧音の許にやってきたのは妹紅。永遠亭で八意永琳から不思議な薬を譲り受けて、妹紅は急いで駆けつけた。

永琳曰く――

その霊薬は不老不死の魂を媒体に、薬を人間に取り入れる事で瞬く間に傷を癒す。血か唾液で混ぜれば媒介液になるから頑張りなさいと。

妹紅は粉末状の霊薬を口に含み、慧音の傷を舐める、みるみる内に傷は治っていく。

安心した妹紅はそのまま慧音を……………

「ん……ふあつ……もう……
ちよつと、それ……！」

慧音の胸の軽い切傷に舌を這
わせる藤原妹紅。予期しなかつた
感覚に、慧音は思わず色を孕んだ
声を上げてしまう。

「――」

「あ、ごめん！ 痛かったか？」

普段は耳にしない、慧音の高い
声色のせいで、不安になり慧音の
顔を仰ぎ見る妹紅。

しかし慧音は苦悶では無く、羞
恥の表情を浮かべていた。

「いた、くはないけど……そんな

ところ……な、舐めたら汚いし、
それに……」

慧音はそこまで言つと、頬を紅
く染めて、手の平で目を隠してし
まった。

「それに……なんだ？」

「それは……その……」

言及する妹紅に、それに応える
ことが出来ずに、口ごもる慧音。
「体中、傷だらけなんだ。化膿し
たりするとダメだろ？ 永琳か
ら貰った霊薬だからすぐよくな
るはずだ」

「い、いって……ひゃ！」

再度、傷口を舌で嘗める。それ
に呼応するかのように、慧音は声
を上げた。それは痛みから来る声
ではない。どちらかと言うと、嬌
声に近い悲鳴。

「ど、どうした、さつきから？
……やっぱり痛かったか？」

「違う、違うんだけど……なんだ
かこそばゆくて、それなのに……
なんだか熱い……」

涙で薄く潤ませた瞳で、妹紅の
眼を見詰める慧音。

「も、う……」

慧音の、熱の籠った視線に『あ

』られたように、同じく瞳を湿ら
せる。そして、傷口に近づけてい
た口を下へとずらしていく。その
まま妹紅は、慧音の服を小さく押
し出す突起を嘗め上げた。

「——ひあつ！も、も、も、
どこを……あつ……んー」

制止の声を掛けようとするも、
布越しで感じる。まるで背を静電
気が駆け抜けるような、そんな感
覚に言葉を詰まらせる。

「ち、ちよつと待って……！」

妹紅の肩を、そつと押し返す慧
音。妹紅はその手を掴み、慧音の

眼を覗き込み……

「けいね、嫌……か？」

そう尋ねた。

「嫌じゃ……無い。もこうだった

ら、嫌じゃ……ない……」

妹紅から眼を逸らし、消え入り

そうな声で囁いた。それを聞き、

妹紅は慧音の頬を慰撫するよう

にし、そつと唇を重ねた。

「ん……ちゅ……」

両者の口の端から、淫猥の水音

が白濁した液体を伴い、とろ……

と、漏れ出した。

「ん、む……ちゅ……ふはっ」

息をすることも忘れ、ようやく

酸素を求めて口を離す二人。互い

の口に銀糸で出来た橋が繋がる。

「う、はあ……もこ、う……!!」

慧音がついさつきまでとは打

つて変わり、強引に妹紅の唇を食

るように啄んだ。

「ちゅ……ちゅるる……ん、はあ、

はあ……んちゅ……」


静寂なる部屋に、ただ二人の静

かで、しかし激しく、熱い息遣い

が反響する。

「ちゅ、けいね……？」

「ん、もこう……」



名前を呼び合い、お互いの服を脱がし合う。二人は上半身の、ほんのり紅くなった柔肌を晒した。好意を行動で示すように、再三、唇を重ね合わせた。

「ん……ちゆる……あ、ん……」

二人は時を忘れたかのように、永劫の中で愛を確認し合あう。

「あ、ああ……ん、ん……もう、わたし、なんだか体が……」
唾液を口内で啜り合う内に、妹紅は背筋に甘い、とても甘美な痺れを感じていた。

「大丈夫だ、そのまま……ちゅっ

……ちゆる、あ……んん……！
それを境に、行為が更に激しくなる。歯がぶつかり合うのも気にせず、獣が如く唇に喰らい付く。
「ちゅ、ん……な、に……？ けいね、んちゅ、ひやああああ！」
絶頂。キス、ただそれだけの行為で慧音は絶頂した。唇を繋げたまま、小さな体軀を小刻みに痙攣させて、上白沢慧音は生まれて初めての絶頂を迎えた。

「い、うあ……はあ、はあ……ふあ、ん……」

全身の力が抜け、水になったよ

うに畳に身体を落とす慧音。

「う、ああう……ふああ……？」

目の焦点が定まらず、依然身体を震わせる慧音。妹紅は、横たわる慧音の傍に寄り添い、抱き寄せた。

「けいね、どう……だった？」

「ふっ、あひやまが……からだが浮いて……それ、で、まっしろになつて……頭が真っ白、に……」

「ふふ、そうか……なら……」

妹紅は途中で言葉を切り、自分のズボン、そして慧音のスカートを手早く脱がし、手を秘部へと伸

ばし、繊細で優しい手付きで、下着の下にあった、無毛のそれに愛撫を始めた。

「ひう?! もこう、どこを、ひあん! ま、待つて!

今は、今はだめえ……んんん!」

「けいねの……すこく濡れてる」

くちゆくちゆと、わざと卑猥な

音を立てて、上白沢慧音のそこを

蹂躪する妹紅。下着から腕を抜き、その指先に付いた銀色に輝

く、てらてらと粘つく液体を一瞥

した。慧音はそれを口に含むと、

くちゆくちゆと嘗めました。ちゆ

ば。と、指を口から抜くと、妖艶な笑みを浮かべた。

「けいねの……美味しかった

ぞ？とつても甘くて、とつても

やらしい味……」

再度、味わうように指を咥え

る。愛する人の愛液と、自身の唾

液を混ぜ合わせた媚薬を嚥下す

る。たったそれだけのことで、妹

紅の下腹部は鈍い熱を持ち、淫靡

な液を滲ませた。

「けいね……私も、気持ちよくし

てくれない……？」

こくん。と、慧音は頷き、おず

おずと指を『そこ』へ導いた。

「ん……私も……」

共に秘部を下着越しに触り合
い、互いの快感を高めあい、興奮
を増長させていく二人。

「す、こい……ちよつと触れられ
るだけで、頭……が……！」

「わた、しも……もう……」

快感が、限界へと近付いていく。

興奮と快感がどろどろに混ざり

合った、くぐもつた声を漏らす。

脳裏が白く染まり、絶頂の前兆が

二人の体中を駆け抜け……。

「あ、ああ、いつくう……！！」

二人は同時に絶頂を迎えた。愛に満ちた身体を休めるように寝ころび、暗闇の中で抱き合っていた。互いの存在を確かめ合い、抱き合っていた。

我が身に愛を摺りこむように、相手の身体を撫でまわす。嘗めまわす。二人の肌に薄い汗が張ると、それを更に薄く延ばし嘗める。

「妹紅……」

「なんだ、慧音……?」

不意に、慧音が手を止めて妹紅に声を掛けた。妹紅はそれに、柔

らかい声で返事を返した。

「ありがとう……」

それは、感謝の言葉だった。

「いきなり、どうした……?」

「私のこと……その、あんなに思ってくれて、ありがとう……」

顔を伏せ、再度感謝の言葉。妹紅はそれに、無言で慧音の顔を胸に抱きしめることで答えた。

「妹紅……」

「なんだ、慧音……?」

妹紅の胸から顔を上げ、今夜で一番優しいキスを一つ交わし。

「愛してる……」

不思議の猫のアリス

文・ハムム 絵・相川りょう

アリス・マーガトロイドが意を決して霧雨魔理沙に告白したのは最近の事。彼女達の中は睡まじく、微笑ましい。琴瑟相和すとはこの事だ。

ある日、アリスは魔理沙に美味しい手料理を作ろうと以前に魔理沙が採取してきた不思議なキノコを知らずに調理してしまふ。

何故か裸エプロンで魔理沙を驚かせようと調理するのだが、味見をした途端に身体に変化が。

エプロンははだけて、不意に鏡を見ると……？

しっぽと耳が……な、なにこれええええ！

アリスの身体がまるで猫のように変化していた。

「にゃ、にゃあー！ にゃにゃにゃ、にゃんにゃー！」
言葉を口にしても、それは猫同一。

困惑するアリスの許へ、魔理沙が登場。

にやりと微笑み、魔理沙は口を開く……



「食べたな……アリス」

そのままニヤリと口を歪めて、アリスの姿に微笑する魔理沙。

そのまま沈黙の空隙が時間にして三秒程続き……………

「にゃあああああああああ！」

この様な姿を見られたくないのは当然の事で、黙止を猫語で劈いたアリスだった。

「まー落ち着けアリス。^^^」

「にゃ、にゃにゃにゃー！」

落ち着いてなんかいられるか、という顔付でアリスは魔理沙を見つめている。

「それ一時間位で戻るから、心配する事ないぜ。^^^、アリスがどんな風になるのかなあ、って観たかっただけ」と終始笑顔。それを聞いて安心したのか、腰を落として安堵の溜息を漏らす。……がしかし！

「そうだ。折角猫になったんだし、猫アリスを堪能しよう……！」

「にゃん!？」

「ほーら、アリスこっちだぞ……」

その声と招き仕草にアリスの身体が勝手に反応してしまう。這うように魔理沙の許へ……。

「にゃあ……」

「よしよし、アリスは偉いな〜」

そのままアリスは魔理沙に頭を撫でられていい気分。

「にゃ……っ！」

いつの間にか魔理沙にあやされていた。身体が勝手に……。

「これを食べて、初めて目を合わせた者を本能的に主人と覚えてしまうのが、この『猫天狗茸』の効能なんだぜ！」

「にゃ、にゃにゃっ！」

「じゃあアリスには子猫のようになってもらおう」

そっと魔理沙は指を前へ。

その瞬間、本能的……まさしく動物的本能にアリスはその指を優しく甘噛みする。


「にゃ……んっ、にゃ……んぷ、ちゅ……にゃおん、っ……ぷ……ちゅ、く……にゃお……ちゅっ」

「……………」

やらせた本人はそんなアリスの姿に唾然となつて。

「(アリスすごく可愛いぞ……)」

顔を赤らめて、普段では絶対に見られないアリスのとんでもない言動に興奮していた。



「(このままアリスを襲いたい)」
魔理沙の心臓もぱくぱく。
もう我慢の限界だった。
愛を結んだ。だから次は、身体で、
肌で触れあいたい。
魔理沙は一唾飲みこんで、
「アリス……！」
魔理沙は着ていた全ての衣服を脱ぎ
捨てて、アリスを壁にもたれ掛けさ
せ、耳元で。
「アリス、キスしていいか……」
「にゃ！ ……にゃん」
「それはいいってこと？」
アリスは嬉しそうに頷いた。

呆然と立ち尽くす魔理沙。
甘噛みやら、ちろちろと指先をくすぐったく
舐めたりと痴態を好まないアリスには考えら
れない。そもそも、何で裸なんだ？
あのキノコは別に着衣爆発とか、そんなのは
無くて……。

「……！(はっ、エプロン!)」
そういえば前、冗談で裸エプロンとか言った
ような……。
身に覚えのある記憶にコホンと一言咳払い。
不意に下を見ると、そこには上目使いで魔理
沙を見るアリスが。

「アリス……んっ、ちゅ……」

唇が触れるだけ。さらに今度は馴染ませるような深いキス。

「にゃ、んにゃ、ちゅ、ん……」

次はアリスから。もう魔理沙にデレッデレだ。キスは初めてじゃない。しかし、生肌を触れさせながらのキスは当然お互いとも、初めてだった。

「ちゅ、ん……ふう、アリス、アリス……」

ちゅ、んっ……」

何度も、何度も、交わされる。

「んにゃ……んっ……にゃにゃ、

ちゅ、ぶ……にゃ……んっ

お互いの唇が離されて、銀光に瞬く唾液の橋が出来上がる。

「可愛いよアリス。好き」

「にゃあ、にゃ……ちゅ」

私も、と猫語で言わんばかりに証明のオマケキス。

「ベッドいこう」

「にゃあ……にゃっ」

アリスの軽い身体をひょいと持ち上げて、魔理沙は優しくベッドに押し倒す。

「じゃ、ここ触るからな……」

小ぶりの乳房……ふにゅん。

「にゃん、にゃっ……！」

柔らかな二つの果実が、魔理沙の手のひらの中で変形する。触るだけではアリスもそこまで反応する事は無いが、魔理沙が乳首を撫でると身体がピクンと痙攣させてしまう。

「んにゃっ……」

「ほらアリスの乳首、固くなってる……」

「……にゃ、にゃおん」

小さすぎず、大きすぎずの乳の張りを揉みしだく。美乳とも言えるその乳房に魔理沙は顔を近づけて、一度アリスに目をやる。

「へへ、綺麗なピンク。もっと刺激しなきゃな……舐めるか」

「!？」

有無を言わせず、咄嗟の勢いで魔理沙は味見をするような仕草でチロリと乳首を舐める。

「にゃう、にゃあ……！」


甘美な嬌声を漏らす猫アリスに魔理沙は容赦なく攻めたてる。

乳首を舐めながら、止まっていた両手を乳房に添える。

「んにゃ、にゃ、にゃんっ……」

長く艶り、二人の身体は段々と熱くなってくる。





魔理沙とアリスは体勢を変えて、所謂シックスナインに突入していた。

秘部にゆっくりと舌を添えて、お互いにその蕾を嬲りまわす。

「ふあ……アリス、激しすぎっ」

自分もやっと魔理沙を感じさせる事ができると言わんばかりの顔で、アリスは魔理沙の園を舐め上げた。

「る、れ……ちゅ、んっ……にゃ」

筋目を搔き分けて、侵入していくアリスの舌。魔理沙の身体がピクンと感じているのが分かる。

「んちゅ、じゅ……ぷ、んっ……アリスのここ、濡れ濡れ……」

二人はすべすべな肌を重ねわせていた。

「にゃお、ちゅるる……う……」

互いの秘部からは蜜がトロリと溢れ出している。

好きな人の甘露を味わう幸せ。

相愛の仲故に成せる事なんだと二人は以心伝心であった。

そのまま絶頂を向かえて、呼吸を整えてから、霧雨魔理沙とアリス・マーガトロイドは紅く染めた顔を見合わせる。

「あのさアリス」

魔理沙の表情は真剣そのもの。

「にゃあ？」

アリスは猫語のまま応答し、魔理沙の言葉を待つ。

「えと……その……」

「？」

「あの……これからもアリスとこういう風にしたい
なって……」

「!？」

「好きなのは当然だし、こんなのアリスにしか頼め
ないというか、アリスと一緒にもっと感じていた
いというか……………ダメか？」

「……………にゃん」

アリスは嬉しそうに頷いた。

「そうか……嬉しい」

魔理沙は照れながらも、歯を見せた
爽快な笑顔を浮かべた。

「アリス、好きだ……」

「まりにゃ……にゅき……………」

「もどってきたかな」

「まりさ……魔理沙っ!!」

「アリス!!」

「好き! 魔理沙大好き!!」

「ああ、アリス大好きだZE!!」

二人は瞳を閉じ、抱き合いながら、
口づけを交わした。

後書

この度は東方絵ろ本 DL 版をお買い上げ
頂きましてありがとうございます！

表紙絵の方々のご紹介

- ① 表：七瀬尚 裏：陣之内旭
 - ② 表：ハクハクリ 裏：いちじくきゆう
- (全ての項において敬称は省略してます)

東方絵ろ本②の方は2013年4月現在、
通販はしておりません。予定はありますが、
急に出したり、遅くなったりかもです。
ご了承くださいませ。

皆様に良き東方ライフが訪れますように。



